喜寿を迎えて

辻村 豊昭 (昭和34年 電気科卒)
東京秋工会 副会長

喜の字の草書体を𠀋と書くことから、七十七回目の誕生日を喜寿と称し祝う習慣がある。無事に今年の誕生日を迎えることが出来れば喜寿となるが、決しておめでたいなどとは思っていない。編集長から、何か書けとのお言葉に困惑した。最近文章どころか満足に字を書く機会も殆どない、後期高齢者と呼ばれるようになって気力・体力・眼力・特に記憶力の衰弱が著しいと感じている。このような状態なので、正直言って愉快ではない。

私は昭和14年に樺太の豊原で生まれた。生家は靴の製造販売店を手広く営んでいて、何不自由ない生活だった。昭和20年、玉音放送のあった日の夕刻、連絡船が出港する大泊に移動、翌朝から内地に向け引揚げの大変な移動が始まる。宗谷、津軽の2つの海峡を渡って、母の実家のある秋田に辿り着くまで2週間程費やしたと思う。噂によると、乗船した連絡船の前便と後便が宗谷海峡で機雷に接触して沈没したとの事だった。強運に恵まれていたようだ。

労働力のある男性は引揚げできないため、父は残留となり6人の兄弟・姉妹と母の7人での生活が始まった。昭和35年に父の死亡通知が来た。食料の入手が困難で大変だったが、海も山も身辺にあり食資源も豊富だったので、自分たちが活動し大量の獲物を収穫出来たので、ひもじい思いはしなかった。

秋田工業高校を卒業し、当時給料が高かった会社に入社。製造部門に12年間勤め三十路になってから退職するまでの35年間、営業部門で全国行脚の活動だった。憎まれっ子世に憚(はばか)ると巷で良く言われるが、良くも長期間憚ったものだと思う。

これまで何度病院のお世話になっただろうか。振り返ってみようと思う。骨折では、右手首や親指など14か所になる。大きいのは、右脚腓骨(ひこつ)骨折で2度の入院。肋骨は亀裂骨折と合わせて7か所であった。

急性肺炎、これはある老人ホームになまはげ実演で慰問に行った翌日から3日間、40度超の高熱が続き意識不明となった。医師からは、家族・親族を招集して来てもらった方が良いと言われたと後で聞いた。御陀仏寸前まで追詰められたが、お花畑に行っていないし閻魔大王にも逢うこともなくこの世に生還出来た。

尿管結石では2回入院した。尿管内部にコーテリングした尿酸が破壊し結晶状になり神経を強烈に軟激した。真っ赤な血尿と激痛に驚嘆した。医師からビールを大量に飲んで縄跳びをしなさいと指示があった。

尿管狭窄症でも入院した。激しい尿意があるが排出することが出来ない状態になり、救急車のお世話になった。前立腺肥大とは異なり尿道の一部が先天的に狭くなっていて、そこの部分が詰まって排尿が出来なり、内視鏡で切開手術をした。現在も投薬を続けており3ヵ月毎に検診している。

痛風は25歳頃から、足首に激痛を感じた。入院はしなかったが、俗に言うように風が吹いても痛い。20年来発作はないが投薬は継続中である。最近の尿酸値は9mg/dl前後でやや高い。

虫垂炎の手術は40歳過ぎてからだった。この年齢になってからの虫垂炎は珍しいと医師から言われた。

腹膜炎を併発していたため、3ヶ所を開腹し、膿を吸引しながらの処置で長時間を要した。入院は15日間、普通の倍かかった。あと1時間遅れたら危なかったそうだ。

糖尿病は45歳頃に血糖値が600mg/dlまで急上昇、急遽入院加療、食事療法、運動療法等、教育を受け1週間で退院。3ヶ月毎の検診と投薬を継続中。最近の血糖値は120mg/dl前後。ヘモクロビンは7%前後で比較的に安定している。

黄疸で入院したが2週間経過しても快方に向かわず、強制的に退院し大病院に再入院した。精密検査の結果、胆管結石で胆汁が腸に排出出来ない事が原因とわかり、治療方針が胆管結石に集中。石を削除して快方に向かった。両病院合わせて1ヶ月の入院生活だった。先に入院した病院では肝硬変で腹水があるので余命6ヶ月と医師から家族に報告があったと後で聞かされた。全くの誤診だった。

蜂窩識炎(ほうかしきえん)、75歳にして患った耳にした事のない病気だった。皮下に化膿菌の感染がおこり急速に拡大する化膿症で、局所の傷が原因との事だ。右足の臑(すね)が赤く腫れあがり激痛があって病院に行ったら即入院となり、絶対安静2週間と診断された。抗生物質の点滴と局所の冷湿布の加療をして12日間で退院した。現在も半年毎に検診している。

眼科は白内障で右目を手術した。糖尿病の合併症と言われている。緑内障も右目にあり、点眼薬で治療を継続中である。虫歯は全て治療済みだが、最近少々ガタが来ているようだ。血圧が高いと診断され薬を飲んでいる。上が120～130mmHg、下が65～75mmHgで安定している。細かいのはまだあるがこの位にしよう。

上京して60年近い間に、こんなに病院のお世話になっていたとは驚きだ。健康管理なんて考えたことがなかったし、摂生なんてした事もない。何時御陀仏になっても良いと思っている。ストレスを極力なくして、俺流の生き方を継続して行くつもりだ。

後列右：辻村氏